

詩篇二三篇

「主は私の羊飼ひ。」

私は、乏しいことはありません。

主は私を緑の牧場に伏させ、

いこいの水のほとりに伴われます。

主は私のたましいを生き返らせ、

御名のために、私を義の道に導かれます。

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、

私はわざわざいを恐れません。

あなたが私とともにおられますから。

あなたのむちとあなたの杖、

それが私の慰めです。

私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、

私の頭に油を注いでくださいます。

私の杯は、あふれています。

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと  
恵みが、私を追ってくるでしょう。  
私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

(詩篇二三篇)

## 主は私の羊飼ひ

今晚、主の助けをいただいて、短いうちにも含蓄がある、詩篇二三篇の御言葉を共に黙想したいと思います。

「主は私の羊飼ひ。私は、乏しいことはありません。」

これはダビデ王が口にした言葉です。

ですから、私たちは、次のように考えてしまいやすいのではないのでしょうか。

「ダビデが『私は乏しいことがない』と言うのは当然ではないか。ダビデは小さな羊の群れを追う貧しい羊飼いの少年だったのが、この時には王様になっていたのだから」

しかも、単に王であるというだけではなく、ダビデは非常に強大な権力を持つ王であつたのです。必要の際には戦いのために、何千何万もの兵士たちを送るほどの力がありました。そして大きな権力がある上に、格別に富裕な王でもあつたのです。

ですから私たちは自分勝手に思い込み、「だからダビデは『私は乏しいことがない』と言つたんだろう」と考えてしまいがちです。

ダビデは確かに富裕な王でした。彼は神殿建築のために、英貨九億ポンド以上に相当する莫大なお金を集めることができたのです。それだけの金額があれば、英本国の巨大な負債が一挙に支払えるでしょう！そして彼自身の個人的な財布の中から、神殿建築のために、英貨一八〇〇万ポンドを捧げました。歴史上、そのような話は他に聞いたことがありません。

しかし、ダビデが「私は乏しいことがない」と言つた本当の理由は、彼が繁栄を誇つていたからではありません。ダビデは主が彼の羊飼いであるということを、唯一の拠り所としていたのです！

主が彼の面倒を見てくださいました。主が彼のことを心配してくださいました。主が彼のために食物を備え、彼を養われたのです。

私たちにとつても、最も大切なことは、主イエスが私たちの羊飼いであること、またそれゆえに、私たちが主イエスの羊であるということです。そしてもし私たちが主イエスの御声を聴いているなら、私たちは本当に主の羊であると知ることができます。

自分自身に尋ねてみようではありませんか。

私たちは主イエスの御声を聴いているのでしょうか。主の語っておられることに注意して耳を傾けているでしょうか。私たちの生活や態度を通して、主を喜ばせ、主の御言葉を実行しようと努めているでしょうか。そして何よりも、羊のために命を捨ててくださった方、哀れな罪人を贖い、信じる者すべてに救いを与えてくださった方を、私たちは信頼しているのでしょうか。

これらの質問は極めて大切なものです。確信をもって、その一つひとつの質問に答えられるよう心がけてください。これは私自身も実行していることです。

私たちがこれらの条件をことごとく満たしているなら、たとえ最も貧しい者であっても、最も無知な者であっても、地上で最も試みに遭っている者であったとしても、キリストの羊であるという事実によって、私たちもまた、「私には乏しいことがない」と言うことができるのです。

またここで、特別に注意していただきたいことがあります。

「私には乏しいことがない」という言葉は、ただ体の必要に関して言及しているだけでなく、心の必要に関してのみ言っているのではなく、私たちが地上で必要とするすべてのものについて述べているのです。

私たちの直面している霊の戦いがあまりに激しく、次第に自分の弱さ、無力さを痛感し、もう自分ではどうにもならず、支えてくださる神に全く頼り頼むしかない状態に追い込まれるとき、ここに私たちの慰めとなる言葉があります。この御言葉はダビデだけではなく、私たちが羊飼いなる主イエスを知っているなら、私たちのためでも

あるのです。

天国に至る道のりを歩んで行く中で、どんな種類の、どんな必要があったとしても、私たちはダビデと共に「私には乏しいことがない。私の天のお父さまが私の羊飼いだから。すべての賛美を受けるにふさわしい、尊い主イエス・キリストが、私の助け、私の友、私の兄、私の救い主だから。主は決して私を見離さず、見捨てられることもない！」と宣言することができるのです。

最も弱く、頼りない、最も無知な神の子供にとって、神に教えられて歩むことは、何という素晴らしい祝福なのでしょう。ですから、もう一度大切な質問をさせていただきます。

「あなたは個人的に、キリストの羊の群れに属していらっしゃいますか」

私が心に願い、祈るのは、皆さん一人ひとりが熱心に「主は私の羊飼いです。私には乏しいことがない」と言うことのできる心の状態を求めてくださることです。

## 緑の牧場

二節で、羊飼いと羊という比喻が引き続き用いられています。

「主は私を緑の牧場に伏させ」

「私をわずかばかりの草の所に追いやり」ではなく、緑の牧場、柔らかい草の牧場に伏させてくださるのです。

そして、羊は無理矢理に追いやられるものではありません。緑の草、柔らかい草、「緑の牧場」をゆつくりと楽しみ、羊として横たわり、また起き上がります。ここで用いられている場景は、私たちに神の子供の祝福がどのようなものを教えてくれています。世の人々は、主にある私たちの幸せを知りません。ですから、当然のことな

がら、神の子供としての祝福の中に入ることもできないのです。

私たちクリスチャンの目は開かれ、古い自分の性質のおぞましさ、すなわち悪魔の虜<sup>とりこ</sup>にされ、その思いのままに神の忌み嫌われることを行い、神の御心に完全に背いている状態を見せられました。さらに、主は私たちにこの失われ滅びた状態を示されるだけでなく、私たちがそれを神の御前で認め、私たちは不完全で、失われた滅び行く者に過ぎず、自分で自分を救うこともできないのだと告白することを喜ばれたのです。しかも、それだけではありません。神は聖霊によって私たちを助け、主イエス・キリストが罪人のためにしてくださった御業に、単純に、ただ一筋に、全く拠り頼むようにされたのです。イエス・キリストは私たちの代わりに、私たちの果たすべきであったすべての律法を完全に守り、多くの罪のために私たちが負うべきであった刑罰を負われました。それは私たちが神の前に義人として立つことができるためでした。

つまり、私たちは神にあって正しい義なる者と認められたのです。自分自身は本来、罪深い不義な者であるのにもかかわらず、ただ神にあって義とされたのです。私たちは、この主イエス・キリストを信じる信仰によって、神の子供とされただけでな

く、神の相続者、またキリストと共に相続する者とされました。そしてすでに、この世で肉体を持って生活している現在においても、私たちの数知れない罪はすべて赦されているのです。

すべての罪が赦されるために、私たちが死ぬまで、あるいは主イエス・キリストの来られるまで待つ必要はありません。救いを与えてくださる主イエスにただ信頼を置く瞬間、私たちの数え切れない罪は赦され、永遠に忘れ去られてしまうのです。このことは何という特権、何と言い尽くすことのできない祝福でしょうか。そしてその結果、聖霊による平安と喜びが私たちの心に満ちるのです。

私たちは今や、恐れることなく神について考えることができます。いわば、本来罪深い者であるにもかかわらず、永遠の聖なる神を少しも恐れることなく、その御顔を仰ぎ見ることができるようです。何と尊いことでしょうか！ 何というすばらしい恵みなのでしょうか！

私たちが地上で信仰生活を送る間、あらゆる種類の試練、困難な状況、また弱さ、どうしようもない状態の中で、神は私たちを助けてくださいます。そして、その後つ

いに私たちを御側近く引き寄せてくださるとき、死を通してか、主イエス・キリストの戻って来られるときまで生きて主の御元に上げられてか、ともかく天の故郷に連れられるとき、私たちは相続地を受け継ぐことになります。

そしてその相続地は、天のお父さまがひとり子に与えられる相続地に劣るものではありません。主が仲介者としてなさった奉仕、地上でなさったすべてのこと、あらゆる苦しみを体験されたこと、暗黒の時を通過されたこと、無数の罪人を救うためになさった御業の報いとして、神は御子に相続地を与えられるのです。

天の父なる神が、これらすべてのゆえに御子に与えられる栄光と報いを、御子に信頼をおく私たちは共に受け継ぐ者となります。ですから主イエスを信じる私たちは、次のように告白することができますのです。

「私は地獄にこそふさわしい者であるにもかかわらず、天国に入れるというだけではありません。神の右の楽しみの川を享受するだけでもありません。賛美と栄光を受けるにふさわしい主イエス・キリストに、天の父が仲介者としての御業の報いとして与えられる栄光を、私たちにも共に分かち合っていただけなのです！」

これは何という驚くべきことでしょうか。もし世の人々が、イエス・キリストを信じる罪人がその信仰のゆえに受けるものがどんなものかを知ったなら、皆が喜び勇んでキリストを求め始めることでしょう。しかし、それが正しく理解されないために、知られていないために、すなわち不注意と無関心によって、世はこの祝福の前を通り過ぎてしまうのです。そして、あまりに多くの場合、その恵みに気づくのは遅すぎる結果となります。

「主は私を緑の牧場に伏させ」

ここで用いられている羊に関する場景は、私たちに非常に大きな祝福と幸福を約束しています。この祝福は、ただ主イエス・キリストに信賴した結果与えられるものです。ですから私たちとしては、さらにこの場景を思いめぐらし、さらにこの祝福を体験していくべきなのです。

次に、「緑の牧場」が描かれているだけでなく、「憩いの水」が描写されています。

「いこいの水のほとりに伴われます。」

羊の臆病な性格のゆえに、これは静かな憩いの水です。このことはわざわざ特筆されているのです。羊が導かれる飲み水のありかは、おびえて逃げ出してしまうような山の激しい濁流ではありません。羊の性格を考慮して、静かな憩いの水に伴われるのです。彼らは恐れて逃げ去るようなことはありません。

## 義の道

「主は私のたましいを生き返らせ、  
御名のために、私を義の道に導かれます。」

私がここで述べることは、(すでに話したことがあると思いますが) 信仰の後退した人を主のもとに連れ帰ることとは関係がありません。ヘブル語では、この言葉は「主は私のたましいを新しくし」あるいは「主は私のたましいを活気づけ」という意味になります。私たちは、気持ちの良い夜にぐっすり眠ることによって、新しい力を得ます。また暑い夏の収穫の季節に、一杯の冷たい飲み水は働く農夫に活気を呼び覚まします。そのように、霊的に神の子供である私たちは、すばらしい私たちの羊飼いによって新しくされるのです。

私たちを霊的に新しく力づけることは、私たちの尊い主イエス・キリストのまさに喜びとされることです。どんな場合でも、試練と困難を通して、あるいは私たちが出会う厳しい試練を通して、心がうなだれてしまうとき、一新され、力づけられる必要を感じることでしょう。そのようなとき私たちは、主イエス・キリストの前に御言葉を差し出し、主御自身について約束されていることを思い出していただくことができます。

「神である主は、私に弟子の舌を与え、  
疲れた者を言葉で励ますことを教え」

主は新しい力を必要としている者を言葉で励まし、慰め、神の恵みによって弱った者の手を強めてくださるのです。この主イエス・キリスト御自身についての尊い御言葉は、イザヤ書五〇章四節にあります。私はキリストにあるすべての愛する兄弟姉妹たちにお勧めします。この祝福に満ちた御言葉を、今までなさってきた以上に用いてください。

「主は私のたましいを生き返らせ」

御言葉を用いて、約束されているこの恵みを体験させていただくではありませんか！ 子供のように単純に、私たちのすばらしい主イエス・キリストに信頼しましょう。心がくじけそうになるとき、霊的に大きな試練に直面するとき、尊い友なる主イ



エスにどうか心を開いてください。私は長年の間、何度も何度もそうしてきました。それによって私は支えられ、慰めを受け、そして幸せであり続けることができました。

私は尊い主イエスに、最愛の親友として接しています。私の心をすべて主の御前に注ぎ出し、あらゆることを伝えます。そして必要なときにはいつでも、私が疲れをぬぐい去り、霊的に新しくされるために、私を励まし力づけてくださるように乞い求めるのです。そして、主は私を助けようとしていつでも待っていてくださる方であることを私は経験しました。

「主は私のたましいを生き返らせ、

御名のために、私を義の道に導かれます。」

主は私たちが正しい道、「義の道」に歩むように助けてくださいます。私たちはすぐに主の御元を離れ、愚かな罪深い欲望に従って歩む生活に舞い戻ってしまいやすい

ものです。ですから、いつも主の道に歩み続けることができるように、私たちは主に拠り頼まなければなりません。この三節の後半の部分は、主に「私のたましいを生き返らせ」ていただく目的が何であるかを示しています。すなわち次のような意味になります。

「主は私のたましいを新しくし、正しい道を歩むようにと私を導いてくださいます」

私はわざわざいを恐れません

「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、  
私はわざわざいを恐れません。

あなたが私とともにおられますから。  
あなたのむちとあなたの杖、

それが私の慰めです。」

ここで私たちは、詩篇の作者が彼の人生の中には最も大きな試練、最も大きな苦しみを通過することもあるのだということを認めていることに気づきます。それどころか、命の危ういような、死の試練をも通ることを予測しているのです。しかし彼の口から出る言葉は「たとい、死の陰の谷を歩むことがあっても、私はわざわいを恐れませんが」というものでした。なぜそのように言うことができたのでしょうか。私たちが偉大な医学の力を持っているからでしょうか。とんでもありません！ 墓の一步手前にいるような状態で、私たちは肉体的な力を頼りにすることができるようか。そうではありません。全くの反対です。

本当の理由は、主イエスが私たちと共にいてくださるからです！

「私はわざわいを恐れませんが。あなたが私とともにおられますから。」

ああ、何というすばらしいことでしょうか。主は私たちが涙の谷を通るときも、私

たちと共にいてくださり、私たちのことを心配してくださるのです。

私たちがいつも以上に主を必要とするとき、親友として、助け主として、支えとして主を必要とするとき、主は決して私たちを見捨てず、見放されることもありません。最も厳しい、最も大きな試練に襲われるとき、死の寸前にまで追いつめられるとき、また私たちの心も体も尽き果ててしまうようなとき、私たちはこの言葉を告白しましょう。

「あなたが私とともにおられます。私の尊い主イエスよ。あなたは私とともにいてくださいます。あなたは決して私をお見捨てになつてはられません。私が弱く、全くどうしようもない状態にある今も、あなたは私とともにいてくださいます。あなたは全能の主、私の友、支えてくださる方、慰め主、私の力であられます」

何と貴重な恵みでしょうか。

「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れませんが。」

愛する神の子供たちの中には、真に生まれ変わった神の子供であるにもかかわらず、死の瞬間をいまだに恐れている人々がいます。

「私が死ぬとき、いったいどうなるのだろう」

と彼らは考えるのです。そのような方々は、どうぞ自分に言い聞かせてください。

「私はわざわざいを恐れません！」

私たちが何者かであるからではありません。私たち自身に何かをする力があるからでもあります。ただ、このように書いてあるからです。

「私はわざわざいを恐れません。

あなたのむちとあなたの杖、

それが私の慰めです。」

私の杯はあふれています

今まで羊飼いと羊の関係を見てきましたが、最後の二つの節では、別の場景が用いられています。

ここでは、家の主人が客を招いているという比喻の下に、神と神の子供たちの親密な関係が描かれているのです。

「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。」

この節にはいったいどういう意味があるのでしょうか。「食事」とはいったい何のことでしょうか。

ここには二つのことが含まれています。一つは、私たちのまことの食物である、主イエス・キリスト御自身のことです。私たちは主に信頼し、神がイエス・キリストにあつて与えてくださった祝福の中に入っていくことを求め続けるべきです。律法を全うし、罪を贖<sup>あがな</sup>われたイエス・キリストこそ、神が私たちのために備えてくださったまことの食物であり、このキリストにあつて私たちは霊的な養いを受けるのです。

もう一つは、神の御言葉です。私たちは聖書を持っていますが、その中に神の御心が啓示されています。これもまた、神が私たちのために備えてくださった食事なのです。

しかも、サタンのあらゆる激しい憎しみにもかかわらず、あらゆる敵の反抗にもかかわらず、神は私たちのために食事の用意をしてくださるのです。

「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ」

しかし、ここで実際のな質問が生じます。

私たちは本当にキリストに養われているでしょうか。主イエス・キリストが私たちにとつて何になられたのかを最大限に理解しようと努めているでしょうか。贖い主、偉大な大祭司、そして私たちを御側に呼び集めるために再臨される主としてのイエス・キリストについて思いめぐらしているでしょうか。私たちはその主の御元で永遠に共に住むようになるのです。

イエス・キリストは私たちの友、助言者、また力として、私たちにとつてどのような存在なのでしょうか。私たちはキリストにある恵みを求めているでしょうか。そして日々、(聖書で使われている表現を用いると) 救いの兜<sup>かぶと</sup>をかぶっているでしょうか。すなわち、主イエスの再臨のときに与えられる救いの完成を待ち望んでいるでしょうか。これらのことによつて日々自分を慰め、励ましているでしょうか。

これらのことを深く思い巡らすことは、私たちが聖霊による平安と喜びを持つために、非常に大切なことです。そして平安と喜びに満ちている私たちを見るなら、世の人々は神の子としての祝福がどんなにすばらしいものかに気づくようになるでしょう。それによつて私たちは主に栄光を帰するだけでなく、同時に周りの兄弟、姉妹た

ちに励ましを与え、弱っている人たちを強めることができます。

「私の頭に油をそいでくださいます。

私の杯は、あふれています。」

東洋で大きな家に住む人が、親友の誰かを食事に招き、一日をその家で共に過ごすとき、まず最初になされることの一つは、召使いがその来客に足を洗うための水を手渡すことでした。しかし、それだけではありません。友人に対する敬意のしるしとして、頭に注ぐための油も用意したのです。それによって招いた人は、自分の家を訪れてくれた友人に歓迎の意を現しました。現代の私たちの実生活において、このような方法で歓待を受けることはないので、私たちはこれよりもはるかにすばらしいものをいただいています。

私たちには聖霊が与えられているのです。聖書の中で、油は幾度となく、聖霊の象徴として記されています。そして、聖霊が与えられているということは、私たちが確

かに天国に行けるという保証でもあります。私たちは確かにキリストの栄光にあずかるようになるでしょう。確かに私たちは、キリストの似姿に変えられ、栄光の体を持つでしょう。これらのことはすべて、聖霊のもたらしてくださる賜物の中に含まれているのです。何というすばらしい賜物でしょうか。

このような恵みに私たちの心を向け、いつも思い巡らしているとしたら、心は自然と喜びに満ちあふれるでしょう。私たちはこの上もなく幸せであるはずです。

そういうわけで、私と同じ信仰を持つ愛する兄弟姉妹たちに、私がぜひともお勧めしたいことは、神が私たちに与えてくださっているこれらの恵みをさらに深く心にとめ、自分自身にあてはめて考えてくださることです。そうするならば、あなたの喜びはさらに豊かに増し加わることでしょう。そして、その結果として何が起ころのでしょうか。あなたは詩篇の作者と共に言うことができますようになります。

「私の杯はあふれています」

つまりこういうことです。

「私はあまりに幸福で、圧倒されるほどです。私は杯に何かを入れているというだけ

ではありません。たくさん入れているというだけでもありません。杯がいっぱいというだけでもありません。私の杯はあふれ流れているのです」

神の子供であるということは何という祝福なのでしょうか。ポンド、シリング、ペンスがあるからではありません。多くの建物や、何千エーカーの土地を所有しているから、あるいは莫大な額の資金を手に行っているからというのでもありません。そのような種類の祝福ではないのです。ある神の子供は、そんなものはほとんど持っていないかもしれません。全く持っていないかもしれません。しかしその心には、聖霊による平安と喜びがあるのです。神の子供として、心にあふれてくる深い平安と喜びを抱く特権にあずかっているのです。何と尊い祝福でしょうか。

## 主の家

ついに最後の節まできました。

「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと

恵みとが、私を追ってくるでしょう。

私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」

貧しい人が、豊かな人の家に客として招かれました。貧しい人はその家に入り、そこが本当に楽しいところであることを発見しました。彼は幸福でした。彼の欲しいと願っているものはみなその場所にあり、彼は満たされていました。

さて、彼はどんな結論に達したのでしょうか。

「私はここが本当に素晴らしいところであることがわかりました。ここにるのが楽しいのです。私はこの家にとどまり、もうどこにも行きません」

この描写は、神の子供たちがキリストを深く知るときにどんなことを発見するかを物語っています。単に、神がキリストにあって与えてくださったものを体験するだけではありません。

「私の杯はあふれています。私は幸せでいっぱいです」

と言うだけではありません。

「私は抱えきれないほどのものを受けています。私は本当に楽しいのです。この道を行くことは本当にすばらしいことだとわかりました。もはや、外の場所へ移っていくことはできません。私は天の父の家に永遠に住まうでしょう」

これがキリストを信じる者たちに与えられる地位です。そして、もし私たちが全き心を持って主の道に歩み、真に心を神に明け渡しているなら、その結果としてここに導き入れられるのです。

私たちは楽しみ喜び、その尊さに圧倒されているので、今の人生においてさえ、主の道を決して離れないことを願います。

私たちの古い性質は、この世で手に入る幸福を求めていました。しかし、結果は失望に終わるのみでした。一、二、三時間もすれば、世的な幸福は過ぎ去るものだからです。

しかし、主イエス・キリストを信じる信仰によってもたらされた私たちの地位は、

数日間だけでなく、数カ月だけでもなく、数年だけでもなく、永遠にわたる幸福を保証しています。ですから私たちは心からこう言うのです。

「私はこの道にとどまります。私はこの道で、こんなにも幸せです。私はこの道を決して離れません」

それだけではありません。

「私の命の日の限り、いつくしみと恵みとが私を追ってくるでしょう。私は今や、いつまでも幸せな人となるのです。そして私は天の父の臨在の中にとどまり続けるでしょう。私はもはや、父の家を離れることはありません。神の子供であることが、どんなにすばらしく、どんなに尊いことを知ったからです」

皆さん。このことは、実は私自身の七一年半に及ぶ幸せな経験そのものなのです。ですから、私はこの聖書に基づいた人生計画を、まだそれを手にしていないすべての人に推薦いたします。これは特別なこの人、あの人のためだけにあるものではありません。神はこの祝福をいただきたいと願うすべての人に、喜んで分け与えてくださいます。私たちは、ただ乞食のように手を開いて、神が与えようとされているものを受け

取ればよいのです。

私たちは、自分たちが刑罰以外のものをも受けるにふさわしくない者であることを認めなくてはなりません。私たちは本来持っている罪深い性質のゆえに、神が私たちに授けようとされている祝福に全く値しない者であることを認めなくてはなりません。このことを認めた後、救い主なる主イエス・キリストに信頼をおきさえすれば、神からのすばらしい贈り物をいただくことができるのです。

まだ、この贈り物を受け取っていない人がいるなら、今、受け取ろうではありませんか。まだ主イエスに信頼をおいていない人がいるなら、今、信頼してみてもいいでしょうか。ああ、それは何と言葉に尽くせない祝福でしょうか。

私は自分が救われた最初の夜、ベッドに横たわっていたときのことを良く覚えています。私は自分の罪が赦されたことを知って平安で満たされていました。そして天国が私の故郷となったこと、今や生まれ変わって天国への道を歩く者とされたことを知り、私の心は飛び上がるほどの喜びではちきれそうでした。

それ以来、私はこの道を歩み続けています。そして、まだこれを知らないすべての

人が、この祝福を手にするのを心から願っています。

どうか神が、御自身の祝福を、豊かな祝福を、キリストのゆえに、皆さん一人ひとりの上に注いでくださいますように。



## 解題

マルコ・シユ編集委員会

「祈りは応えられる」とクリスチャンはみな信仰的に言うことができる。だが、確信を持って祈り、日々その祈りの応えをいただいていると証しすることができる人は、そのうちの何人だろうか。

ジョージ・ミユラーの信仰と祈りの生活は、多くのクリスチャンの励ましになってきた。祈り、主に拠り頼むことによつて孤児院を建て上げていく物語は人々を感動させ、人々は主の栄光を誉め讃えた。

また「祈りは応えられる」という確信に至つたという人の多くが、ジョージ・ミユラーに関する著作を通して「祈りの原則を学んだ」ということをよく聞いた。このことは超教派的に語られていて興味深い。

ジョージ・ミユラーを知るにはA・T・ピアソン著『信仰に生き抜いた人』（いのちのことは

社」とA・E・C・ブルックス編『ジョージ・ミューラーの祈りの秘訣』（同右）があり、充分な情報を提供してくれている。この二書は必読書として、信仰書の柱となってきたといえるのではないだろうか。

ところが、数年前イギリスのプリストルに行った編集者がミューラー・ハウスを訪れた。そこでは毎日、早天祈祷が続けられていて、召天後約一〇〇年もジョージ・ミューラーの信仰が息づいており、聖霊の御臨在を強く感じる場所であるという。

彼はその時、一週間の滞在をお世話になっただけでなく、十数点のパンフレットを持ち帰った。なんと驚くべきことに、その中のほとんどはジョージ・ミューラーのメッセージであつたのである。それを発見した時の色めき立った編集室を想像していただくことができるだろうか。時が満ちて本書を上梓できることは私たちの喜びでもある。

A・T・ピアソンによると、ジョージ・ミューラーの生涯は五期に分けられるという（巻末の関係略年譜も参照）。

- 一期 誕生から新生まで 一八〇五——一八二五年（二〇年間）
- 二期 新生から生涯の事業に従事するまで 一八二五——一八三五年（一〇年間）

- 三期 その時から伝道旅行の時代まで 一八三五——一八七五年（四〇年間）
- 四期 伝道旅行の開始から終了まで 一八七五——一八九二年（一七年間）
- 五期 伝道旅行の終わってから死まで 一八九二——一八九八年（六年間）

パンフレットはこの四期・五期に人々のニーズに合わせて作られたものであらうと思われる。

特に本書の第一部第二章「祈りに応えられる神」、第二部一章「新生したばかりのクリスチャンへ」に収録されたものは、ジョージ・ミューラーの信仰を余すところなく伝えている圧巻である。他の短編も一つも落とせないものばかりであつたので、パンフレットのほとんどを収録することにした。

第二部第二章「喜んで捧げる祝福」を裏付けるような証しが『ハドソン・テラーの生涯とその秘訣』ハワード・テラー著（いのちのことば社）の一三章「暗黒の日々」に詳しく書かれている。ジョージ・ミューラーは最も困難な中国奥地宣教を続けるハドソン・テラーに祈りと励ましと必要な献金を捧げ続けたのである。当初、ハドソン・テラーが財政困難に

陥っていた金額が一千ポンドあって、その金額をジョージ・ミュラーが捧げたのである。

この当時の貨幣価値を円に換算することは非常に困難なので、原文のポンドの表示のままにしておいたが、当時の労働者の一カ月の生活費が約三ポンドであったことから、一ポンド三万円と推定して、一千ポンドは約三千万円位に相当するのではないかと思われる。

第二部第五章「友なるイエス」は召天の直前に書かれたものであり、その内容は天国へ帰る予感に満ちあふれている。ジョージ・ミュラーの信仰の最後を読み取ることができて、貴重な短編であろう。妻に先立たれ、多くの友人を失い、九二歳の高齢である。しかし、「私には友なるイエスがともにおられる」と語る。そして「主イエスは私を迎えに来てくださる」という確信を記してこの世の業を終えたのだ。事情を理解して読み進めると涙を禁じえない感動がある。

さらに、第三部に収録した詩篇二三篇の講解メッセージは、一八九七年六月二十日（ビクトリア女王即位六〇年祭）にイギリスのプリストル、ベテスダ・チャペルにて説教したものである。これはジョージ・ミュラー召天の前年に当たる。ご一読くだされば秀逸なメッセージであることをご理解いただけることと思う。

本書は祈りの人ジョージ・ミュラーに直接触れることができ、一語一句を味わっていただけるように編集を進めた。

第一部「祈り」を熟読され祈りの原則を身につけて、「祈りの力」をあなたのものにしていただきたい。このことによって、日本のクリスチャンの祈りの体力が向上することは、日本のリバイバルへの道であることを確信する。第二部からクリスチャン生活を学んでいただきたい。特にこの中で強調されているのは、御言葉の学び、黙想である。

ジョージ・ミュラーの召天後、孤児院を支える神の働きが変わらないことを、『信仰に生き抜いた人』の巻末に「六十年後」と題して語られている。ところが、持ち帰ったパンフレットからミュラー・ハウスの現況を知ることができたので、その内容をかいつまんで紹介しておこう。

その後、時代の流れは大きく変わり、ミュラー・ハウスもその対応を余儀無くされた。特に第二次世界大戦後、英国が福祉国家になってからはそうである。

一九四八年にミュラー・ハウスの理事会は、五つの巨大な孤児院を売却することに決定した。

そして、代わりに三つの新しい働きを創設した。

一、ミュラーの時代と違い、精神的に不安定な子供、両親の離婚の犠牲者を中心に一度に一二名までの子供たちの世話をするデイ・ケア・センターを設立。仕事に出なければならぬ片親の子供、健康を害した親の子供などを援助している（一九七〇年代後半設立）。

二、英国でも現在三つの家庭の中、一つが離婚で崩壊している。その結果、若者の間での犯罪率が上昇している。深刻な家庭問題は、ある時は経済的困難、両親の肉体的、精神的病などが原因で起こる。そこで子供だけでなく、親も含めた総合的な援助を提供するファミリー・サポート・センター（家庭援助センター）を設立した（一九七〇年代後半）。現在二〇〇の家庭を助けている。

三、老人ホーム（一九八三年設立）。

また、聖書知識協会の一部でもともとミュラーが設立した、ブリストルの書店を通しての

働きは、現在エバンジェリカル・クリスチャン・ブックストア (Evangelical Christian Book Store) という名で知られるようになっていいる。

## 関係略年譜

一八〇五年（九月二七日）プロシヤ、クロッペンシュタットで誕生。

一八二五年（十一月）小さな家の集会を訪問した後、入信。

一八二九年（三月）ロンドン、ユダヤ人宣教会（Christianity among Jews）（現在ユダヤ人教会宣教会）  
会〈Church Mission to the Jews〉として知られる）で働くためにロンドンに赴く。

一八二九年（五月）病の床に伏す。自分が死の床に就いていると確信。

一八二九年（夏）デボンのテインマスで、快復に向かう。この時初めてヘンリー・クラークと  
出会う。またブラザレン運動の創始者たちとも知り合う。

一八三〇年（一月）ロンドン、ユダヤ人宣教会との関わりを離れる。

一八三〇 テインマスのエベネゼルチャペルで牧会の任に着く。

一八三〇年（八月）エクセターで、メアリー・グローブス（アントニー・ノリス・グローブスの  
妹）と結婚。

一八三〇年(五月) ヘンリー・クラークと二人して、ブリストルのギデオ・チャペルの牧会者になるようにとの招聘<sup>しょうへい</sup>を受諾。

一八三四年 聖書知識協会を国内、国外のために設立。

一八三六年(四月) 最初の孤児たちの家をブリストル、ウィルソン・ストリートに設立。最初三〇人の子供たちを受け入れる。同じ通りにさらに三つの孤児院を設立。

一八四九年(六月) 新たな目的を掲げて、ブリストルのアシュリーダウンにさらに孤児院を建設。三〇〇人の子供たちを収容(現在アレン・ハウスとして知られている)。

一八五七年 アシュリーダウンに二番目の孤児院を設立(ブルーネル・ハウス)。一八六二年アシュリーダウンに三番目の孤児院を開設(ミューラー・ハウスとして知られる)。

一八六六年(二月) ヘンリー・クラーク召天。

一八六六年 バーナード博士、ロンドンで孤児院を開設。

一八六九年 四つ目の孤児院(デイビー・ハウス)をアシュリーダウンに設立。

一八七〇年 アシュリーダウン最後の孤児院(カボット・ハウス)設立。新たに二〇〇〇人の孤児たちに助けの手を差し伸べる。二〇〇人以上のスタッフを総動員する。(二

八七〇年代の一大特徴は毎年年間一万ポンドを二〇〇人近くの宣教師たちに献金

一八七〇年(二月) メアリー夫人召天。

一八七一年(二月) スザンナ・サンガーと結婚。

一八七五年 宣教旅行開始。四二カ国を股にかけて二〇万マイル(三三万キロ)を旅する。

一八七八年(二月) アメリカ合衆国大統領と会見。スザンナと共にホワイットハウスを案内される。

一八八一年 英国国教会子供養護協会が初の孤児院を設立。

一八九二年(五月) 最後の宣教旅行を終える。

一八九四年(二月) スザンナ夫人召天。

一八九七年(六月) ビクトリア女王の即位六〇周年の際、ベテスタ・チャペルで説教。

一八九八年(三月二〇日) 六時に平安の中に召天。九二歳のときであった。

# 祈りの力

定価 2000円  
(本体1942円)

028-677-0224  
N18.9.20  
JUL

発行 一九九三年十月十五日

著者 ジョージ・ミューラー

翻訳 マルコーシュ・パブリケーション委員会

発行所 マルコーシュ・パブリケーション

住所 187 東京都小平市学園東町三ー六ー四一

電話 (〇四二三) 四一ー九七七七

FAX (〇四二三) 四五ー八四〇九

振替 東京一ー四五七五四

印刷所 東信社

製本所 カナメブックス

乱丁・落丁本はご面倒ですが、小社販売係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

ISBN4-87207-125-C0016

# '90年代は霊の戦いの時代

(定価はすべて税込みです)

## 聖霊の第三の波

C・ピーター・ワグナー

今、世界中のキリスト教会を覆う聖霊の第三の波とは何か。教会成長学の世界的権威ピーター・ワグナー博士の名著。 定価1200円

〈グリーン・ボックス〉

## 日本の霊の壁を打ち破れ

C・ピーター・ワグナー

1990年C G I大会の衝撃・感動のメッセージを完全収録。今、日本において必要な霊の戦いとは何か。 定価520円

## 霊の戦いの祈り

C・ピーター・ワグナー

戦略レベルの霊の戦いの全貌を明らかにする本書が出版されることは、今後の日本宣教のために画期的なもの信じ、大きな感動と感激を覚える次第です(有賀喜一)。 定価1600円

## 神のために都市を奪回せよ ジョン・ドーソン

私たちの戦いは血肉ではなく、悪霊との戦いです。私たちは主イエスの御名と血潮によって、勝利を得なければなりません(滝元明)。 定価1600円

## 地域を支配する霊

C・ピーター・ワグナー編著

本当に、サタンは悪霊に世界の各地を支配させて、世界をその魔の手に握っているのか? 19名の大執筆陣。 定価1900円

## 悪霊を追い出せ

奥山 実

著者がインドネシアの宣教時代の豊富な体験をふまえ、実践と理論の両面から悪霊追い出しをとらえる、話題・待望の好著。 定価1500円

## サタンに立ち向かえ

C・S・ロベット

私たちの思いを通して働いている悪霊にどう立ち向かえばよいのか。発売以来大反響、霊の戦いに関する基本的な教科書。 定価1700円

## 霊の戦いの諸相

尾形 守

霊の戦いは様々な領域で戦われている。私たちはそれを見抜き、悪魔・悪霊の策略に立ち向かわなければならない。 定価620円

## 力の伝道

ジョン・ウィンバー

キリスト教の伝道方策を変える話題の書! 今、注目されている“力の伝道”とは何か。 定価1800円

## 祈りの戦士

シンディー・ジェイコブス

本書は米国において多大な影響を及ぼしました。私は日本のとりなし手の間においても、本書が必読書の一冊となることを信じています(ピーター・ワグナー)。 定価2200円